

CONTENTS

UNICEF最前線

2-3 今そこにある悲惨と危機 第2回
子どもの命を奪う栄養不良

[特別寄稿]

今も飢えと寒さに震えるガザの子ら
ジャーナリスト 古居みずえ



急性栄養不良

上腕計測メジャーで、栄養不良を意味する「赤」が示された2歳のリンちゃん。戦闘激化前は、適切な薬の治療や理学療法を受けて健康状態が改善しつつあったが、今は体重も激減し、深刻な急性栄養不良に直面している。(ガザ地区、2024年2月15日撮影)

© UNICEF/UNI519938/El Baba

子どもの命を奪う栄養不良

ユニセフなど国連の5つの専門機関が2024年7月24日に、最新の『世界の食料安全保障と栄養の現状 (SOFI)』報告書を発表した。それによると2023年には約7億3,300万人が飢餓に直面したという。

今回は、ジャーナリストの古居みずえ氏のガザリポートとともに、食が脅かされる状況について考える。

(近藤敦子)

子どもの栄養不良による影響は、命に直結する。2022年に5歳の誕生日を迎えられずに亡くなった子どもの数は490万人。直接の死因は肺炎や下痢、マラリア、麻疹、HIV/エイズなど感染症だが、免疫力の低下や回復するための体力不足など、死因に栄養不良が関わっている。栄養不良は目に見えにくいからこそ恐ろしい¹⁾。

先の報告書でユニセフのキャサリン・ラッセル事務局長は、次のように述べている。「栄養不足は子どもの生存、身体の成長、脳の発達に影響を及ぼします。(中略)世界の5歳未満児の4人に1人は栄養不良に苦しんでおり、栄養不良は子どもたちに長期的な悪影響を及ぼす可能性があります」。

発生要因

では慢性的な栄養不良である飢餓は、なぜ起こるのか。飢餓の頻発するアフリカやアジアの国で食料が不足する原因として、干ばつや洪水という自然災害、紛争などが挙げられるが、背景には世界経済のグローバル化がある。本来、世界各地で人は農耕や牧畜など土地に根ざ

した生業があり、自給自足で生活を賄ってきた。それがグローバル化の進展で、食料は世界中を移動して売り買いされるようになり、結果として豊かな国に食料が集まり、貧しい国には食料が届かないのが実態だ²⁾。

FAO(国連食糧農業機関)によると、世界の穀物生産量(2023年)は28億トン以上あり、世界中すべての人が十分に食べられるだけの量は生産されていると推定される。先進国には食べきれないほど食べ物が溢れ、大量のフードロスや食べ過ぎによる肥満や糖尿病など病気も問題視されている。日本の食料自給率は38%(2024年、カロリーベース、農林水産省)と依然低いが、多くの食品を海外から買っているので不足は感じない。

一方で、世界では紛争や災害で住む土地を追われ難民となり、貧しさゆえに飢えに苦しむ人が増え続けている。毎日の食事に困るほど食料が不足している人の数は7億3,300万人(FAO推計)に上り、アジア、アフリカなどの開発途上国に多い。

報告書のなかで、ラッセル事務局長は強調する。「飢餓の大きな要因である紛争、気候変動、景気後退は深刻さを増し、健康的な食品が手頃な価格で手に入らない状況、不健康な食環境、根深い不平等といった根本的な要因とともに、いまや(それらが)同時多発しており、個々の影響を増幅させています。」

1月パレスチナとイスラエルで停戦が合意され、食料を満載したトラックが検問所を通過する光景に安堵した。食は平和になってこそ血肉となる。国際社会が関心を持ち続けることも大切だ。ラッセル事務局長の「子どもの栄養不良をなくすために早急に資金調達を強化することは、道義的な必然であるだけでなく、未来への健全な投資でもあるのです」という言葉を重く受け止める。

参考文献

- 1) ユニセフホームページ 特集：栄養不良
- 2) 七尾 純『食の総合学習 食と環境—安全な食べ物をもとめて』2011年 あかね書房



リバーナイル州の保健施設で受けた、上腕計測メジャーを使った栄養検査で「赤」=重度の栄養不良と診断された1歳の子ども(スーダン 2024年6月)

©UNICEF/UNI607338/Ahmed

〔特別寄稿〕

今も飢えと寒さに震えるガザの子ら ふるい 古居みづえ

一日一食

2024年11月30日、医療組織のボランティアのガザ女性、シャヘドさん（22歳）は友人と二人でなんとか小麦粉を手に入れようとパン屋へ向かった。しかし、そこには何千人もの人たちがひしめき合っていた。小麦粉一袋を手に入れるどころか、1kgも手に入れることはできなかった。そこでは皆が必死でパンを手に入れようとしていた。その場にいた二人の女性と一人の少女が、パンを手に入れようと人びとの間で窒息死した。

ガザ地区は2007年からイスラエルによって封鎖が続いてきた。人の出入りは禁止され、燃料や食料、医療品に至るまで制限されてきた。2023年10月、イスラーム組織ハマスの襲撃により、イスラエルはガザ地区に軍事侵攻した。以来、ガザは封鎖が強化された。それでも国連やNGOの民間団体から食料や生活必需品など、十分ではないが入っていた。しかし2024年5月、イスラエルがラファ検問所を閉鎖してからは、入る物資は極限に制限された。わずかに入ってくる物資輸送車もイスラエルによって攻撃されたり、武装住民による物資の略奪も起こっている。

国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）の活動をイスラエルは1月末にも停止させようとしている。このまま停戦がなければガザの人びとの飢餓が進む。すでにガザの人たちは一日一食しか食べることができない人がほとんどだ。

成長阻む栄養失調

シャヘドさんの仕事は、栄養失調の子ども、授乳中の女性、妊婦の健康診断を行ったりして調査をすることだ。彼女がサプリメントを配布していると、1人の少年がどこからか近づいて来て、サプリメントを求めた。彼女によると、その少年は「お腹が空いたんです。空腹で眠れない。空腹を抑えるものがほしい」と言ったという。

シャヘドさんによると、ガザ南部のテントに住むスレイマン君（生後9カ月）は深刻な栄養失調に陥り、重度の免疫不全と貧血に苦しんでいる。顔は青白く、身体は衰弱し、低体重で何カ月たってもまったく増えていない。

生後わずか1歳半のモハメド君も深刻な栄養失調に苦しんでいる。小麦粉、野菜、果物など、成

ジャーナリスト。1988年より紛争下における中東のパレスチナで、とりわけ女性や子どもたちに焦点を当てて取材を行う。2011年の東京電力福島第一原発事故をきっかけに、福島県飯館村にも通い撮影を続けた。映画作品に『ガーダ パレスチナの詩』、『ぼくたちは見た ガザ・サムニ家の子どもたち』、『飯館村の母ちゃんたち 土とともに』『飯館村 ベこやの母ちゃん～それぞれの選択』がある。



筆者

長に欠かせない食品はまったく手に入らず、実年齢よりずっと小さく見える。栄養失調のために彼の髪は抜け落ちていく。

彼らが暮らしているところは普通のテントではなく、プラスチックやパッチを当てたナイロンで覆われたテントだ。テントの中は極度の寒さや暑さになり、普通に眠ったり、休んだりすることが難しい。

「息子が目の前で衰弱していくのを毎日見ながら、私は無力感を感じています。必要なものを与えることができません。私が望むのは、息子が世界の他の子どもたちと同じように幸せで健康でいることだけです」。モハメド君の母親は泣きながら話したという。

年末年始にかけて、ガザの乳児たちの間では低体温症による凍死が増えている。ガザの現在の気候は冬で、雨季に当たる。雪こそ降らないが、雨が降ると気温が大幅に下がる。大半の子どもたちは今、テントや瓦礫の中で暮らしている。パレスチナにおける子どもたちの凍死と飢餓は、天災によるものではなく、戦争という人災によって引き起こされている。一日も早く戦争を止めなければならない。（2025年1月15日投稿）



ガザ地区でパンを求める人びと



栄養失調に苦しむモハメド君